

文章を評価する力を育てるために 2

一文章構成を中心とした課題をもち、質の高い読みを行う一

岩本和貴

1 はじめに

本校国語科では、数年前から継続して課題解決的な学習の実践を中心として取り組んでいる。学習過程に沿って行ったさまざまな実践の反省をふまえ、一昨年度より「課題づくり」の過程を見直している。課題解決的な学習の質を大きく左右するのは、どのような課題を設定できるかによる、と考えたからである。また、特に入門期の国語科学習では、さまざまな学び方の基本を身に付け、確立する必要があるが、質の高い課題設定を行う能力が学び方により広がりや深まりをもたらすことになるだろう。

質の高い課題を設定するためには、教材と確かに向き合う力を育てることが最も大切であると考えた。教材と向き合い、自分なりの考えをもつことが、他者との学び合いの場を一層価値のあるものにしていくだろう。それは、子どもたちなりに文章を客体化してとらえ、評価することに他ならない。

ここでは、説明的な文章の実践をもとに、子どもが文章を評価することのできる能力を高める学習活動の工夫について述べる。文章を評価する能力が高まれば、設定する課題の質も高まるであろう。また、質の高い課題を設定する経験そのものも大切にしたい。

さらに、低学年における学習は、国語科であれ何であれ、学び方の基本を身につける場であると考えている。どのように教材と向き合い、他人の意見と向き合うかを学ぶことができるようにしたい。その学習が、中・高学年において自分自身と向き合おうとする姿勢や能力に結びつくだろう。

2 質の高い「課題づくり」を目指して

(1) 今年度取り組んだ説明的な文章教材とねらい

今年度学習した説明的な文章教材は次の3つである。

- ①「たんぽぽのちえ」(光村図書) ……5月
- ②「サンゴの海の生きものたち」(光村図書) ……9月
- ③「うごくおもちゃを作る」(光村図書) ……11月

昨年度から表題読みを手だてに質の高い課題づくりを試みている。それは、表題読みを行うことで、子どもたちの手による「読みのめあて」を設定し、読みの動機づけを確かなものにし、観点をより子どもに近づけることが可能だと考えたからである。より確からしい内容を予想し、自分たちの予想と比べて読むことで、事例の取り上げ方や文章構造についての感想をもちやすくしたのである。

その上で、昨年度は説明的な文章に、何が書かれているのかを抽象化し、比較することで、文章を評価した。今年度はさらに、それぞれの要素の関係を考え、その軽重や筆者の意図を判断できるようにしたいと考えた。書かれていることがどのような意図でどのように構成されているのかを評価できるようにすることで、より質の高い読みを目指した。

(2) 各教材での取り組みの概要

どのような「読みのめあて」をもつことが、どのような評価に至ったのか、特に論理構成に着目した学習について、③「うごくおもちゃを作る」を例に取り上げて述べたい。

その前に、他の2つの単元における学習の概要に触れておく。

①「たんぽぽのちえ」

たんぽぽを擬人化した表現は、子どもたちに馴染み深いたんぽぽをより身近に引き寄せている。昨年度の教材同様2文節からなるこの表題は、子どもがイメージを抱きやすく、方向性も収束しやすい。

授業で事前に予想したのは、ここで言う「ちえ」とは何かという点のみである。「たんぽぽの」と明確に限定されているため、教科書の記述に近い意見が揃った。

A：「たんぽぽのちえ」とはどんな「ちえ」だろう？～子どもたちの予想内容

- ・わたげをとばす。
- ・春にさく。
- ・あちこちにさく。
- ・グラウンドや道のすみっこにさく。
- ・犬などがおっこやふんをするのが、えいようになっている。
- ・わたげがかかるい。
- ・わたげがはねみたいになっている。
- ・ふんでもふんでも、なかなかかれない。

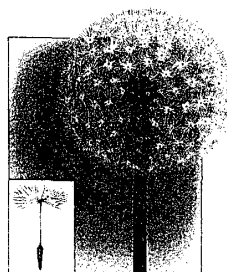
読みのめあてを絞り込むため、次のような行った。

B：たんぽぽにだけ見られる、たんぽぽならではの「ちえ」は何だろう？

「わたげ」を中心に、たねの飛ばし方について詳しく述べてあるのではないかと、という意見に収束していった。

子どもたちの初発の感想には、全てがたんぽぽの「ちえ」についての感動や自分なりの意見が表現されていた。また、いろいろな要素を比較して説明してあるものではなく、時間経過に沿って、たんぽぽが仲間を増やすためにどのような「ちえ」を働かせているのかについて説明されているという指摘が多くあった。従って、教材文の始めから順を追って読み、どのように組み立て整理されているか考えようというめあてができた。

子どもたちは、たんぽぽの花が咲いた後、種を飛ばすまでを時間経過に従って、簡潔にわかりやすく説明しているが、一部説明が時間経過の順になっていないところもあり(右枠内、傍線筆者注)、かえってわかりにくい点もある、などの評価をした。



やがて、花はすっかりかれて、そのあとに、白いわた毛ができてきます。
このわた毛の一つ一つは、ひろがると、ちょうどらっかさんのようになります。たんぽぽは、このわた毛

についているたねを、ふわふわととばすのです。
このころになると、それまでたおれていた花のじくが、またおき上がります。そして、せのびをするように、ぐんぐんのびていきます。

②「サンゴの海の生きものたち」

「たんぽぽのちえ」と違い、内容を特定する言葉がないので、子どもたちは様々な予想を立てた。

発問は、「A：『サンゴの海の生きものたち』とは、どんな生きものだろう？」「B：生きものたちについてどんなことが書いてあるのだろう？」の2点である。

A：「サンゴの海の生きものたち」とは、どんな生きものだろう？

- ・サメ
- ・ヒトデ
- ・クラゲ
- ・タイ
- ・ねったい魚
- ・サンゴ
- ・ワカメ
- ・ウニ
- ・イルカ
- ・クジラ
- ・イセエビ
- ・イソギンチャク
- ・タコ
- ・イカ
- ・マグロ
- ・サケ
- ・エイ
- ・イワシ
- ・サバ
- ・アジ

子どもたちが「海」というイメージからすぐに連想できるものと、前単元で学習した「スィミー」に登場したものの、給食の食材として馴染み深いものが挙げられている。

B：生きものたちについて、どんなことが書いてあるのだろう？

- a みんながたすけあって生きていること。
- b つよい生きものがよわい生きものを食べること。
- c いろいろな生きものが、どうやって生まれて大きくなるかということ。
- d 生きものが大きくなるようすを比べること。
- e どんな魚がどんなふうにつかまえるかということ。

aは教材文を事前に読んだ子の反応だと考えられる。b c dは昨年度学習した「どうぶつの赤ちゃん」を意識したものである。いずれにせよ、この表題からは、比べて述べてあるのか、関係を述べたあるのかの判断はできないので、整理しないまま教材文を読み、初発の感想を書いた。教材文で述べられている事柄に単発に反応している感想が多かった。事例の取り上げ方にあまり意図が感じられず、事柄同士のかかわりがよく分からないためであろう。

授業では、問題提起文やまとめの「たくさんの生きものたちが、さまざまにかかわり合って」という記述に注目し、「どんな生きものたちが」、「どんなかかわり合いをしている」と説明されているのか、について検証する読みを課題にして学習を進めた。

子どもたちは、教材文の工夫として、事例に新鮮味があり興味を惹かれる点と、段落分けが明快な点を挙げた。同時に、なぜ事例に挙げられている生きものを選んだのか、2つの事例の関係が不明瞭、生きもの同士のかかわりを筆者がどうとらえているのか明確でないため、これらの事例は本当の意味で「やくに立って」いるのか、「まもり合っ」ているのか分からない、などの評価を行った。

3 筆者の論理構造を評価する具体的な実践～「うごくおもちゃを作る」の取り組み

(1) 論理構造に着目する読者を育てるために

前項でも述べたように、課題づくりの質を高めていくためには、子どもたちが論理構造に注目して読むことのできる姿勢と力を身に付けることができるようにする必要がある。初発の感想の段階で、内容中心の読みから、より抽象度の高い客観的な読みへ高めていくのである。

(2) 教材文「うごくおもちゃを作る」のとらえ方

「うごくおもちゃを作る」は、ものを作るための具体的な「説明書」的な文章である。作り方の手順（時間経過）を大切に、必要な事項を簡潔に述べようとしている。

まず「うごくおもちゃ」について〈ざいりょうと道ぐ〉〈作り方〉〈あそび方〉を説明した後、遊び方を工夫した「べつなあそび方」について述べている。前半の構造は「準備」→「作業」→「活動」という簡潔で明確な流れがあり、もの作りの説明書として一般的な展開である。後半は、工夫するポイントのみを述べ、子どもたちの工夫の余地を残した書きぶりになっている。いずれも、「作業」をしていく内に、結果としておもちゃや遊び方の全体像が見えてくる構造である。

この文章の構造や内容は、問題を内包していると考えられる点がある。

文章構造上、〈作り方〉は作る上で最も効率のよい順番で書かれているはずである。

この部分は、「じゅんぴ」「組み立て」の2つの部分から成り立つ。

いずれの段落も簡潔な述べ方で、短く説明されている。が、説明が不十分な箇所がある。特に、読者が小学校2年生であることを考えると、理解に時間がかかるだろうと考えられる。例えば、「あな」の空け方やクリップの加工についてがそうである。

〈作り方〉の説明は、作業順の点で挿し絵とうまく合致していないことが指摘できる。また、説明してある作業順が不適當なところがある。「わゴム」の通し方がそうである。

さらに、この文章は、冒頭で「わゴム」の力を使ったおもちゃ作りを提案し、作ってい

くうちにおもちゃの全体像が見えてくるとい構造をもっている。おもちゃの製作過程を楽しみながら進むことができる、という意味では面白いかもしれない。しかし、おもちゃ作りの説明として、性質や形状を含めた全体像が説明文の最初に具体的に示されていないことで、2年生の児童には具体的なイメージが湧かないという問題も生じる。一読してスムーズに理解できない要因であろう。

(3) 指導にあたっての見通しと配慮

低学年の子どもたちは「おもちゃを作る」ことに対しては大いに興味・関心をもち、教材文の質の如何に関わらず意欲的におもちゃを作り上げる。しかし、おもちゃができあがることで、教材文をきちんと評価することができなくなるようでは問題がある。前述のような本教材の特性を2年生なりにしっかりとつかみ、自分の作文に生かすこと、友だちの作文を評価することが、本単元の大きなねらいとなる。したがって、子どもたちがおもちゃを作るという過程で、教材文とどのように向かいあうのが大切である。

子どもたちは昨年度の学習で、文章の要素を抽象化し比較することで、説明的な文章の構造や事例の選び方について学んできた。今年度は、事例の適切さや順序についても学習している。本単元ではそれを生かし、教材文の読みでは事例の取り上げ方とその順序について、また自分たちで説明文を書く学習では、おもちゃ作りの過程がより分かりやすい文章構造を工夫できるようにしたい。その際、小見出しを付ける活動を通して取り上げ方や順序が明確になるようにしたい。また、教材文の学習で学んだことを土台として、自分たちで作った評価の観点をもち、それぞれの説明文を評価できるようにしたい。

ものを作る説明のための文ということを意識しながら読むことができるように、次のような学習計画を設定した。

第一次 簡単にできるおもちゃの説明文を書き、読みのめあてを設定する。

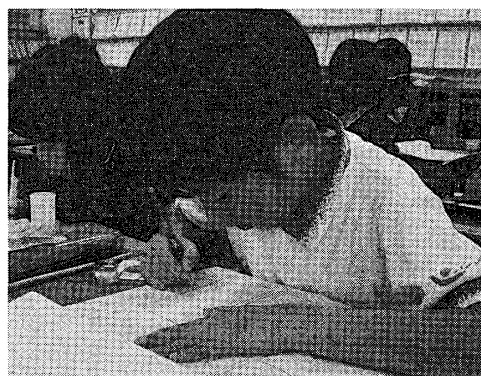
第二次 読みのめあてに沿って本文を読み、実際におもちゃを作って文章を評価し、ものを作る説明を書くときの評価の観点を設定する。

第三次 自分が作ってみたいおもちゃを調べ、作り方を説明する文章を書く。

第四次 友だちの書いた文章を読み、評価する。

(4) 実践の成果

第一次で設定した読みのめあては大きく2つである。1つは「作るじゅん番を正しくわかりやすく書く」こと、もう1つは「作るのに大切なことを、きちんと分けて書く」ことである。このような読みのめあてを設定できたことで、第二次のおもちゃづくりのメモの段階で、文章構造の工夫や課題に迫るものが多く見られた。



教材文の評価として、次の5点が挙げられた。

①必要なことが簡潔に、見出しを分けるなど、整理され書かれている。

②作る順番が意識して書かれている。

③接続語が適切に使われている。

④ゴムを通すところは、順番を変えた方が作業しやすい。

⑤何を作るのか、何のために作るのかわからないところがある。「あそび方」を最初に書いた方が、おもちゃの全体像がつかめる。

次に挙げるのは、第三次、第四次で取り組んだ、ものを作ることを説明する文章とその評価の一例である。説明的な文章には挿し絵があるが割愛した。

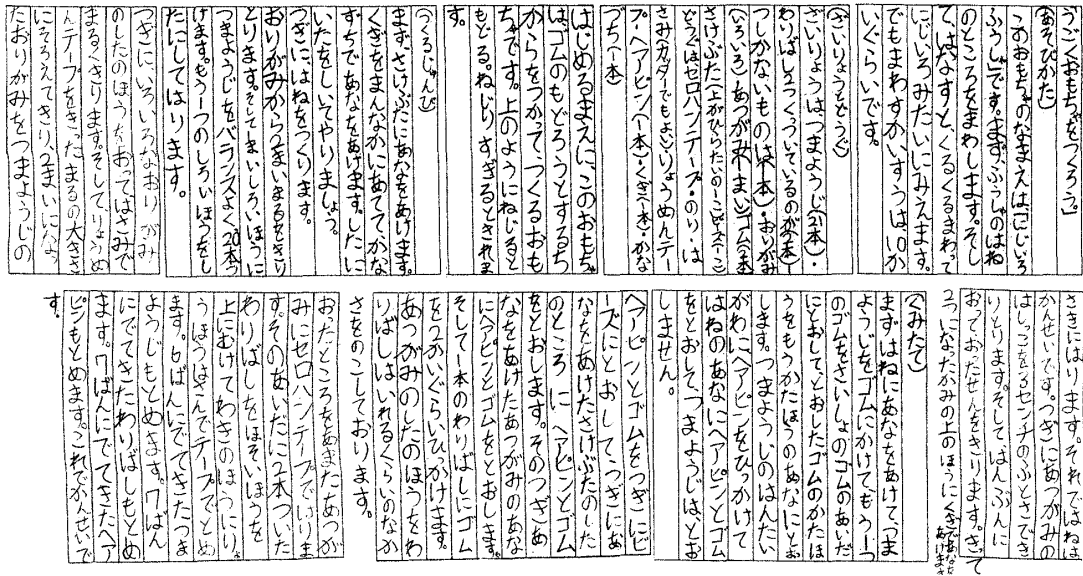
子どもたちの書いた説明的な文章は、教材文を評価することで学んだこと、すなわち

「評価の観点」に沿って書かれており、相互評価もおおむね「評価の観点」を軸に行われていた。これは、次の2点による成果だと考える。

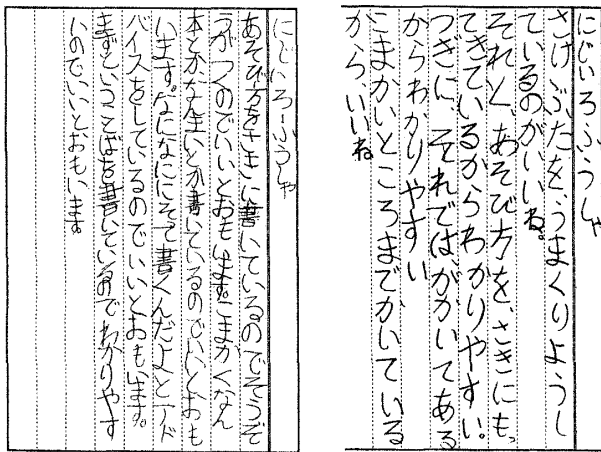
○「たんぼぼのちえ」「サンゴの海の生きものたち」の学習を通して、表題読みから設定した課題が、文章構造を評価するものとして、何を観点に読むかが明快であったこと。

○教材文を評価ができることで、文章を読む手がかりが子どもたちに身に付いてきたこと。

本単元の学習では、第一次に読みのめあてを設定した段階で、第三次で設定した評価の観点に近いものが出そろっている。説明的な文章を評価する力が育ってきたことで、課題の質が高まっていることの表れと考えている。



↑資料1 A児の作品。(あそびかた)を最初を書くなど、構成に工夫が見られる。



←資料2 A児の作品の評価。

B児、C児による。

全員の作品を読み、自分が作ることができそうだと思う作品、学習したことを生かして書いてある作品を数点選び、評価を手紙にして渡した。説明の順序や、接続語の工夫など、第二次に設定した評価の観点をふまえて評価している。

4 おわりに

課題の質については前項で述べたとおりである。しかし、課題づくり、解決、ふりかえりの話し合いのどの部分を子どもたちに委ねるのか、事前に見通せなかったところがある。子どもたちの実態把握や初発の感想の分析を、もっと精細に行わなければならない。また、低学年という発達段階にとらわれて、子どもたちの実態を見誤らないようにし、可能な限り説明的な文章の本質に迫る学習過程を構成していきたい。